

武蔵野日曜聖書講筵 復活節

霊身

——ルカ伝24章13～49節、他——

1973年4月22日

小池辰雄

聖書というドラマ ヤイロの娘 「タリタ、クミ」 霊の大生命 相対的現実に顕れた絶対の生命の徴 ナインの若者 ラザロの復活 我は復活なり生命なり イエス涙をながし給う 根源 現実 本願道を行くのみ 自然法爾者キリスト 「ラザロよ、出で来れ」 エマオ途上のキリスト 近付いて一緒に歩いて中に入る 平安なんじらに在れ キリストの霊骨霊肉 十字架と円 現 無条件に御霊が臨んでくる

【ルカ24・13～49】

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより二里ばかり隔たりたるエマオと
 いう村に往きつつ、¹⁴ 凡て有りし事も互に語りあう、¹⁵ 語り、かつ論じあ
 う程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。……¹⁷ イエス彼らに言い給う『な
 んじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、
¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓
 り居て独り此の頃かしこに起こりし事も知らぬか』¹⁹ イエス言い給う『如
 何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との
 前にて業にも言にも能力ある預言者なりしに、²⁰ 祭司長ら及び我が司らは、
 死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹ 我等はイスラエルを贖
 うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず此の事の有りしより、
 今日のはや三日めなるが、²² なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、
 即ち彼らの朝夙く墓に往きたるに、²³ 屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現
 れてイエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴ 我らの朋輩の数人もまた墓に往
 きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』²⁵ イエス
 言い給う『ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍
 き者よ。²⁶ キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』
²⁷ かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録した
 る所を説き示したもう。²⁸ 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆ
 く様なれば、²⁹ 強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早
 や暮れんとす』すなわち留らんとて入りたもう。³⁰ 共に食事の席に著きたも
 う時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、³¹ 彼らの目開けてイエスなる



を認む、而してイエス見えざるなり給う。³²かれら互いに言う『途にて我らと語り我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³斯て直ちに立ちエルサレムに帰り見れば、十一弟子および之と偕なる者あつたり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスの中に立ち、³⁷かれら怖じ懼れて見る所のものを靈ならんと思ひしに、³⁸イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、靈には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰斯く言いて手と足を示し給う。⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言い給う『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。⁴⁴また言い給う『これらの事は我がなほ汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』

【マタイ9・18～25】

¹⁸イエス此等のことを語り給うとき、視よ、一人の司きたり、拜して言う『わが娘いま死にたり。されど来りて御手を之におき給わば活きん』¹⁹イエス起ちて彼に伴い給うに、弟子たちも従う。²⁰視よ、十二年血漏を患ひたる女、イエスの後にきたりて、御衣の総にさわる。²¹それは、御衣にだに触らば救われんと心の中にいえるなり。²²イエスふりかえり、女を見て言ひたまはる『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんじを救えり』女この時より救われたり。²³かくてイエスの家にいたり、笛ふく者と騒ぐ群衆とを見て言ひたまはる『退け、少女は死にたるにあらず、寝ねたるなり』人々イエスを嘲笑う。²⁵群衆の出されし後、いりてその手を取り給えば、少女おきたり。

【マルコ5・40～42】

⁴⁰人々イエスを嘲笑う。イエス彼等をみな外に出し、幼児の父と母と己に伴える者とを牽きつれて、幼児のおる処に入り、⁴¹幼児の手を執りて『タリタ、クミ』と言ひたまはる。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。⁴²直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。



【ルカ7・11～16】

11その後イエス、ナインという町にゆき給いしに、弟子たち及び大なる群衆も共に往く。12町の門に近づき給うとき、視よ、昇き出さるる死人あり。これは独息子にて母は寡婦なり、町の多くの人々これに伴う。13主、寡婦を見て憫み『泣くな』と言いて、14近より、柩に手をつけ給えば、昇くもの立ち止る。イエス言いたもう『若者よ、我なんじに言う、起きよ』15死人、起きかえりて物言い始む。イエス之を母に付したもう。16人々みな懼をいただき、神を崇めて言う『大なる預言者われらの中に興れり』

【ヨハネ11・1～44】

1爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。2此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。……

11かく言いて復その後いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起こさん為に往くなり』12弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』13イエスは彼が死にたることを言い給いしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言い給うと思えるなり。14爰にイエス明白に言い給う『ラザロは死にたり。15我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』……

20マルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。21マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在しならば、我が兄弟は死なざりしものを。22されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』23イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』24マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦えるべきを知る』25イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。26凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』27彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』28かく言いて後ゆきて窺にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』29マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。30イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。31マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思いて後に随えり。32斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在しならば、我が兄弟は死なざりしものを』33イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、34『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』



35 イエス涙をながし給う。36 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』37 その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』38 イエスマた心を傷めつつ墓にいたり給う。墓は洞にして石を置きて塞げり。39 イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』40 イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言いしにあらざる』41 ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。42 常にきき給うを我は知る。然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給いしことを之に信ぜしめんとてなり』43 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給えば、44 死にしもの布にて足と手を巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。

●聖書というドラマ

聖書は教えの本ではない。私は、「キリスト教」と言わないで、「キリスト道」と言っている。漢訳聖書には、ヨハネ伝の1章1節が、

「太初に言あり」

ではなく、

「太初に道あり」

と書いてある。この「道」という字は漢文では「いう」という。言と通ずる字でもあるわけですが。昔の訳ではやはり、「道あり」と訳してある。漢文の聖書というのは、非常に昔の訳に参考になった基礎のひとつなんです。

そういったわけで、キリスト道ですね。それから、聖書はドラマであるので、教訓の本でも何でもない。これほど面白いドラマはないんですから、どうぞ、聖書というドラマをよく身読していただきたい。身で読んでいただきたい。今日の題は「霊身」と書いた。そもそも、聖書に対する第一の態度は——研究なんかでわかるものではない——からだで、全存在で読んでいただきたい。新しい方も、どうぞ、そういった気持ちでぶつかってください。これほど面白い本はない。特に、劇中の劇はこの福音書なんです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書は、何ととっても、キリストずばりのところで、聖書の始めて終りです。ちょうど、釣りでいうと、鮒釣りが始めて終りのように、聖書は福音書が始めて終りです。

●ヤイロの娘

今日はもちろん、キリストの復活というわけですが、キリストの復活の前哨としまして、マタイ伝9章、ヤイロの娘の甦りのところをちよつと読みましょう。9章18節に、



「18 イエス此等のことを語りい給うとき、視よ、一人の司きたり、拜して言うひざまず 跪ひざまず いて言うのに、

『わが娘いま死にたり。されど来りて御手を之におき給わば活きん』
 なかなかこの司はキリストに対する信頼が全的である。死んだのに、手を置いてくだされば活きると。

19 イエス起ちて彼に伴い給うに、弟子たちも従う。

そうすると、そこに挿話が入ってくる。

20 視よ、十二年血漏を患いたる女、イエスの後にきたりて、御衣の総ふさにさ
 わる。21 それは、御衣にだに触らば救われんと心の中にいえるなり。

十二年血漏を患いたる女が、キリストに、衣に触れば、もうそれで治ると思ったので、衣に触ったところが、キリストの力がそこから出た。それで、

22 イエスふりかえり、女を見て言いたもう『娘よ、心安かれ、汝の信仰なん
 じを救えり』

「心安かれ」は「平安あれ」ということです。私が非常に好きな言葉はこの「平安」という言葉なんです。手紙の表にもよく書きますが、「平安があなたにあるように」という意味で、「平安」と書く。

「汝の信仰なんじを救えり」

とある。

「お前は私の衣に触れば、助かると思った。その信仰が救いのもとになった」

と。信仰が救ったのではないですよ。救ったものはキリストの力です。キリストの力が救ったんだが、そのキリストの力を無条件に受けとったということが救いの契機になったという。まあ少し分解して言えば、そういうことなんです。

「汝の信仰なんじを救えり」

というと、

「それでは、ひとつ信仰を強くしなければ」

と、一生懸命で信仰そのものを強くしようと思う。なにか信念かと思つてね。これがよくクリスチャンが間違いをする。そんなこわばつたらダメですよ、固くなつたら。

信仰というのは、相手のキリストが素晴らしいということ。キリストはもの凄いひとだと。それで、こっちはもう何でもないと行って、幼児の如く楽な気持ちで受けとることが信仰です。いわゆる信仰ではないから、そこをキリストの言葉に躓かないようにしてください。

女この時より救われたり。

という挿話があります。



●「タリタ、クミ」

それから更に、

23 かくてイエス司の家にいたり、笛ふく者と騒ぐ群衆とを見て言いたもう、

24 『退け、少女は死にたるにあらず、寝ねたるなり』

なに、そんなにうろたえ騒ぐか。死んだのではないぞ、寝たんだと。

人々イエスを嘲笑う。

死んだのに、寝たなんて言うものだから、とんでもないと言って、あざ笑ったと。非常にドラマチックでしょ、劇的でしょ。だから、私はドラマだと言う。そのドラマの中に自分を突入して読んでくださいよ。もし、今日、新しい人がいらつしやるとすれば、直ちにその世界に入れるんですから。何年来なければどうだなんて、そんなことはひとつもない。

25 群衆の出されし後、いりてその手をとり給えば、少女おきたり。」(マタイ9:19～25)

その少女の家に入って行って、その手をとったら少女が起きたと、非常に簡単に書いてある。マルコ伝には詳しく書いてある。5章40節のところに、

「40 人々イエスを嘲笑う。イエス彼等をみな外に出し、幼児の父と母と己に伴える者とを牽きつれて、幼児のおる処に入り、

その少女のいる所に入って、

41 幼児の手を執りて『タリタ、クミ』

「タリタ、クミ」とはアラミ語で、キリストの使っていた方言、母語です。「クミ」というのは「起きよ」、「タリタ」というのは「少女よ」ということ。

と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。

「我なんじに言う」というのは註解です。「少女よ、起きよ」ということ。まあ女の方々はこの

「タリタ、クミ」(少女よ、起きよ)

という、キリストの一番じかじかな言葉をすっかり覚えておくといい。いろんなことへこたれたりする時に、キリストが「タリタ、クミ」と仰るから、立ち上がっていける。

42 直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。」(マルコ5:40～42)

「起きよ」という。

「目覚めよ、起きよ」

と。人間はこうやって立っている姿が即ち、起きている姿ですが。身体ばかりでなくて、心が、魂が本当に目覚め起きていなくてはいかん。この「タリタ、クミ」「少女よ、起きよ」という言葉をよく銘記していただきたい。



●霊の大生命

万物が今、冬の眠りから起き目覚めている。太陽の光、光熱によって春にはみな、太陽の光熱自身が「起きよ」と言つて、このように花咲かせているわけです。「スプリング」という言葉がそういった意味で、非常に跳ね上がるような言葉ですが。「目覚めよわがたま」という讚美歌もありますけれども。寝ていても、眠つていても、魂がいつでも起きられる。あるいは、眠りの中でも凄く魂が目覚まされて、示されることも私は経験しますけれども。キリストに——太陽の光、光熱ではなくて——キリストの生命に、光に起こされる。人間は、

「死への病」

なんていつて、相対的な意味では我々は何年かたつたら死ななくてはいいかん。そういう意味においては、死なざるを得ないようにできている。

「すべての人は死ななければならぬ」

なんていう。

「死の眠り」

とかいう。私は、

「キリストというひとは大生命のひとである」

と言う。この宇宙にみなぎるところの生命の焦点。燃えているところの、生命の燃焼してやまず、光熱の燃焼してやまざるところの実体が我々の見ているところでは、この太陽でしようが。それから、諸々のそういった星が宇宙には氾濫している。

神の大生命を本当に彼は天界において既に実存していた。それがナザレのイエスという人物において、この大生命が結晶して顕れた。福音書におけるところの、キリストの言葉、行為、一切の在り方がこの大生命の様々な顕現です。この大生命が本当の霊生という——霊的な生命ですね——この霊の大生命というもの。

もつとクリスチャンはこのキリストに気がつかなくてはいいかん。もう寝ぼけたような、くすぶつたようなクリスチャンなんてものは、そんなのはクリスチャンではない。我々の現実がどんなに波を打とうが、行き詰まろうが、失敗しようが、ぶつ倒れようが、このキリストの大生命の中に、これを受けとらなかつたら、信仰なんていつたつてつまらない。

キリストが、この「タリタ、クミ」と言われるような、そういった言葉は大生命のもの、凄く発動なんです。言葉に爆発しているんだ。ですから、

「わが言は霊なり、生命なり」

と言われたでしょ。ですので、その少女はその死から甦つてしまふ。もうキリストが手を取っただけでも、それだけでも、もうグーツときてます。その手の行為と言葉によって少女は甦つた。

私たちが日常生活においてこの「クミ」「起きよ」という言葉でもって、豁然と目覚め、その生命の中に入っている。これが、我々がこのヤイロの娘ではたと受けとらなければな



らない事態です。これがキリストの——その大生命の質は何かという——愛の本願です。
 「空の空なるかな。すべて空なり」
 という。それはもし、人生が死で終るならば、墓場が終局点であるならば、これほど空しいことはない。諸行無常なんだな。

● 相対的現実に見られた絶対的生命の徴

けれども、そうではない。死んでも死なないところの生命を今、現に、我々が日常において本当に受けとつていなかったら、これほど本当につまらないものはない。これは神の愛、キリストの愛の本願がかくさせる。愛の本願は、その生命は、人に生命を与えるということが愛の一番深い内容です。私たちが死から救い上げて生命の世界に入れるということは、これは愛のほか何ものでもない。神の愛、キリストの愛のほかこれはできないんです。私たちがどんなに人のために同情しようが、どうしようが、人ひとりのひとを活かすわけにいかない。どんなお医者さんがきても、生命を与えることはできない。生命を与えるものは、この生命を本来付与したところの神さまがこの永遠の生命の中に入れる。

聖書は、何のためにこの福音書があるか。天国即ち、永遠の生命の事態、それを人々に与えるためです。それはいかなる哲学であろうが、いかなる文学であろうが、何であろうが、人間の作りだしたいかなるものも、人ひとりの人を生命づけるわけにいかない。

万人は宗教を要する。万人は救いを要するんです。

「諦める」
あきら

なんていうのは誤魔化しだよ。本当は、みな本当に生きてありたい。誰も死を喜ぶものはない。死ねばみな悲しむ。なぜ、悲しむんですか。死というものは、相対的現実においては、一番深刻な現実ですから。

その死という現実をぶち破るもの、これがキリストなんです。神の大生命を身につけていたひと。これが本当の霊身のひとなんです。それはただ「霊体」というのと違う。霊体という、今の肉体に対する霊体ではなくて、「霊身」と私は特に今日書いたのは、そういった霊的な心身一如の実体を今、霊身と書いた。

そういうわけで、キリストの愛の本願がこのヤイロの娘を甦らせた。ヤイロの娘はそのうちにまた死んだでしょう。けれども、この現実においてキリストがかくの如き生命を与えるものであることの、ひとつのこれは徴しるしですから。象徴なんです。象徴と云ったって、観念の象徴ではない。現実をもつてするところの、相対的な現実に見られた絶対現実の徴なんです。相対的な現実に見られた絶対の生命の徴がこのヤイロの娘の甦りの、「タリタ、クミ」におけるところの事態である。

神の事態はすべて、私たちのこの相対的現実において絶対なものが見えない。その最たるものがイエス・キリスト自身です。それがみんな見えない。だから、弟子たちも、い



わんやユダヤ教の連中もみんな躓いてしまった。研究なんていう世界ではないですよ。本当に降参して、その中に自分を投げ入れなければ。降参して投げ入れたら、本当にその世界に入る。

● ナインの若者

その次は、ナインの若者のところ。ルカ伝7章。この記事はルカ伝しか書いてない。さっきのはマタイ、マルコ、ルカ、全部に出ている。11節から、

「その後イエス、ナインという町にゆき給いしに、弟子たち及び大なる群衆も共に往く。12町の門に近づき給うとき、視よ、昇き出さるる死人あり。これは独息子にて母は寡婦なり、町の多くの人々これに伴う。13主、寡婦を見て憫み『泣くな』と言いて、14近より、柩に手をつけ給えば、昇くもの立ち止る。

何をするのだろうかと思つてね、

イエス言いたもう『若者よ、我なんじに言う、起きよ』

ここでも「起きよ」だ。こっちは今度は男の子だ。まあ大変なひとですよ。こういうドラマを見て——人間のつくつたドラマではなく、このドラマは驚くべき現実なんだ——私とはかくこの福音書を開くと、もうそれで楽しくなってしまう。どんな時でも福音書を開くと、もうたまらない。要するに、キリストに酔っているんだな。

「酔心」というお酒が一番いいそうだが、我々の「酔神」だ。「神に酔える人」という言葉がある。スピノザという哲学者がいる。我々はこの酔神、神に酔える、酔神者。この神は即ち、キリストです。直接に神に向つてはいかんよ、キリストに來なくては。キリストという、神さまの真正正味の実証体、もうこれに來るしかない。「神は何処に」といつか話した。神は何処にと、どこを探したつて出てこやしない。福音書のキリストにこなければ。

「我を見し者は父を見しなり。我を見し者は神を見しなり」

と、キリスト自身が言つたんだから。この言葉をもし信じないならば、キリスト教はもうよしてください。

「我を見し者は父を見しなり。我と父とは一つなり」

という、あのヨハネ伝のキリストの言葉を本当にはたと受けとらないなら、もう始めからキリスト教はやめた方がいい。はっきり言っておきますよ。

まあ今の若い人たちは、少し勉強を、学問をやると、すぐ宗教哲学だとか何とかいつて、七面倒臭いことをこねている。七面倒臭いことはあとにしてください。まず一番単純なところを受けとる。そうしたらもう自由自在、何でも今度は展開してくるから。

その寡婦を見て、

「泣きなやるな。大丈夫だよ」



と。涙を本当にぬぐってくださるのはキリストのほかにはない。

「すべての涙をぬぐいたもう」

と。黙示録の終りの方に書いてあるとおりです。聖書とかキリスト教を何か妙なものだと思つて、これを敬遠したり何かしている人たちを、本当に私はお気の毒でしようがない。どうしてそう毛嫌いなさるかと思つてね。

まあどうですか、これ。柩ひつぎに手を置いて、

「若者よ、我なんじに言う、起きよ」

と。柩に手を置くということと若者の身体に手を置くということは、キリストにとっては一つなんだ。もの凄いひとだね。一遍そういうようになってみたいじゃないですか。どうですか。キリストみたいに。なれますよ、本当にキリストに入れば。

「汝ら是我よりも大なる業をなさん」

と言われた。

「汝らは私を本当に受けとつてごらん。お前たちを通して驚くべきことをするぞ」という。

「大いなることをなさんなんて、とてもできませんなんて、おじけることはない。」

「できませんから、どうぞ、あなたがやってください」

と言つて、全托してかかる。

まあ親鸞なんていう坊さんも、あれはもうしようがないんだよ、自分がね。けれども、仕方がないからもう、弥陀の本願というものに完全に自分を全托した。そこにあの浄土真宗の素晴らしいところがでてきた。

15 死人、起きかえりて物言い始む。イエス之を母に付したもう。16 人々みな

懼おそれをいただき、神あがを崇めて言う『大なる預言者われらの中に興おこれり』(ルカ7・

11～16)

預言者どころのさわぎではない。旧約にたくさん預言者が出ました。第二イザヤがあのイザヤ書35章であれだけのことを謳うたっているけれども、それは霊的な示して謳ったんだろけれども、その旧約の預言者たちのそういつた天国的現実をまざまざと示したのがこのキリストですから。まさに預言の成就です。

一切の預言者はキリストというこの大きな湖に注ぎこんでいる。それからこの湖からもろもろの川がまた流れ出しているわけだ。これが使徒たち。預言者たちは注ぎこむところの川であり、その湖から流れ出るものが使徒たち。私たちがその使徒たちの、使徒的信仰者のひとつの枝として、流れとしてキリストの大湖から発している。この湖は預言者の水ばかりではないよ。湖の中にちゃんと泉がある。滾々と湧き出る泉がある。霊泉が湧き出て、そして大きなキリストという湖になる。いろいろな預言者の流れが来ている。それからま



た出て行く。まあそういうようなわけだ。

キリストはこういう具体的な事態を見て、ナインの若者が葬式の、担いで行かれるその途中でもって押さえてしまう。そういうことがちゃんと見えるひとです。自分は死人を甦らせる。死に定められたすべての人たちに本当の生命を与える。そのこと——言葉ではない——事実をもつてするところの証明である。キリストほどの証明はできない。彼自身が決して死なないところの生命を持っていた。

「キリストはどういうように復活したか」

なんて、そんなことを詮索することはひとつもない。キリストはもう復活せざるをえないひとです。十字架の贖罪の大業を果たせば、あとは今までのナザレのイエスどころでない、もつと凄い生命体として彼は現れざるをえない。

●ラザロの復活

それから、ご承知のとおり、ラザロの復活です。このヤイロの娘とナインの若者とラザロの三つの甦りの事態はキリストの復活の前哨として忘れることのできない三つの例です。ヨハネ伝11章に、

「¹爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。

マルタとマリヤは非常にキリストと親しかったですから。

²此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。

香油というのは、女性がしょつちゆう、皆さんでもお使いになるわけですが。なにもこの場合に限らないでしょうけれども。

⁵イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。

この「愛する」は「アガパオー」という字が使つてある。

¹¹かく言いて復その後いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起

こさん為に往くなり』

キリストはこの時も、「死んでいる」と言っているのに、「眠っている」と。これを「よび起すために行くんだ」と言う。

¹²弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』¹³イエスは彼が死にたること

を言い給いしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言い給うと思えるなり。

イエスはあらわに今度は言いたもう。実はそうじゃない。

¹⁴爰にイエス明白に言い給う『ラザロは死にたり。

もう三日もたっているからね。

¹⁵我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとて



なり。然れど我ら今その許に往くべし』

と。神」さまの大生命を受けとらせんがために行くのだと。

20 マルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。21 マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。』22 されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』

まあそう言つたわけだね。

23 イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』24 マルタ言う『おわりの日、』

復活のときに甦えるべきを知る』

終りの日にと。この世の終りにね。大体、このユダヤ教ではそういうようにみな考えていたわけです。そして、甦つて、善なる者は天国に、悪なる者は地獄に行く。

●我は復活なり生命なり

25 イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。』

26 凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』

と。イエスは、

「おおよそ生きて我を信する者は永遠に死なない」

と言う。

「死んでもそれは死ではないぞ」

ということです。相対的な意味における生でも死でもない。これは次元の違った生なんです。キリストが神を信じていたということは、

「神さまのこの大生命を本当に受けとっていた」

ということですよ。神さまの存在を信じていたなんていう、そんな呑気なものではない。普通、

「神は在るかないか。神を信するか」

なんて言つて、たとえ在ると信じたところで何になるんですか。そんなことではない。信ずるとは即ち、その实在に連なることなので、「受けとる」ことなんです。「信ずる」という言葉が非常に、ある意味において躓きになるので、私はいつも「信受」と言わなくてはダメだという。これは仏教でも信受という言葉がある。

「我は復活なり、生命なり」

と。いわゆる相対的な死から本当の生命の世界に、永遠の生命の世界に帰すことが「復活」なんです。ただ「息を吹き返した」なんて、そんなものではない。復活ということは即ち、本当の真の大生命である、その一つの現象であるにすぎない。復活ということは何か非常に驚いたりするけれども、本当の大生命というのはそういうように現象せざるを



得ない。だから、

²⁶ 凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』

「凡そ生きて我を受けとる者は、永遠に死なない。汝これを本当に受けとるか」と。

²⁷ 彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信す』

なにか少し神学的な答えだ。

²⁸ かく言いて後ゆきて窃にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びた

もう』と言う。 ²⁹ マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。 ³⁰ イエスは未だ

村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。 …… ³² 斯てマリヤ、イエスの居

給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、

我が兄弟は死なざりしものを』と言う。

同じようなことを言った。その点、マリヤもマルタも同じようなわけです。「居てくださればよかつたのに、ちよつとこれ遅かつたですよ」と。

● イエス涙をながし給う

³³ イエスかれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、

それは深刻だよ、何といったつて。死んでるんだからね。みんな泣いているわけだ。

心を傷め悲しみて言い給う、

「心を傷め悲しみて」という訳がちよつとあまりふさわしくない。心に、あるひとつの憤り、

聖なる憤りを感じて、心を動かして言いたもう。

³⁴ 『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』 ³⁵ イエス涙をな

がし給う。

そこはまたキリストの、まあ、いいところと言つたらおかしいけれども。イエスというひとは、笑うときには笑う。泣くときには泣く。一緒にその同じ気持になつてくださるわけです。同じ気持になつて、それつきりだつたら、これはどうにもならん。同じ気持になりながら、そこから今度は、救いあげてしまふ。

「イエス涙を流したもう」

というのは、いかにも、本当の人間性（メンシュリツヒカイト）だな。ゲエテの言葉に、

「あらゆる人間的な欠陥、それは純なる人間性がこれを贖いとる」

とある。ゲエテという人は、よく宗教的な境地と、そういつた本当に人間的なものとを渾然としてつかまえることのできる人です。キリストの「純なる人間性」がここにも表れている。本当の人間性が。人間性のない、何か方程式みたいな人はダメですよ。そういった、泣くときには泣く。笑うときは笑う。けれども、それは本当にその現実を共感し、共受しながら、それから救いあげる。

³⁶ 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』



この「愛せしぞ」は、さっきのとは違う字が、「フィレオー」という字が使つてある。この場合、人間的に愛するという意味です。

キリストは、キリストの愛だつて、人間的な愛と、それから非常に天的な愛と、やはり渾然としている。分析なんかできない。しかし、いつも中心になっているのはもちろん天的な愛です。こないだ私は、『ハレルヤ』30号に書いたでしょ。あの一節は非常に大事な一節です。

「一般にアガペーというと、単に天的な霊的な精神的な愛と思われ、地的な愛エロースと天地のへだたりがあるように考えられている。しかし本当のアガペー愛はエロース愛の次元にまで深く降りてきて、

キリストがやっぱり一緒に泣くわけだ。
罪を犯す危険性をもったエロース愛を包んでこれをアガペー愛の中に溶かしこんで変質させる力をもったどん底の愛である。」

キリストというのはそういうひとです。相手がどんな人であろうと、その場に入つていて、そいつを救いあげてしまう。

「あれはちよと無理だ」

なんてことはない。ただ、聖霊に逆らう者だけは困る。それは打ち倒す。打ち倒して、彼が目覚めれば、

「悪かった」

と言つて平伏せば、それは救い給う。その点で例外はないわけです。

37 その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』

「盲人の目はあけるひとだったが、死人だけは無理だったな」なんて。

● 根源現実

38 イエスマた心を傷めつつ墓にいたり給う。

「心を傷め」というのは心に、あるひとつの憤りの気持をもって、「傷める」というのはそういう気持です。

墓は洞にして石を置きて塞げり。39 イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』40 イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言ひしにあらずや』41 ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう

「目を挙げて」というのは霊界を見ることです。霊界の神に目を注ぐということです。

『父よ、我にきき給ひしを謝す。』

「きき給う」ではなくて、「きき給ひし」といつて完了なんだ。まだことが始まっていない



のに、

「きき給いしを謝す」

と言うんですから、ここらがもうキリストの信仰がもの凄いい信仰であることがわかる。相対的現実を既にもつと深い現実で受けとつてしまっている。

だから、私はそれを絶対現実、根源現実という。根源現実を受けとつていている世界なんです。根源の現実です。それは相対の世界で、あるいはそのときに現象しないかもしれないかもしれませんよ。しないからといって、それでへこたれたらダメですよ。イエスは、もうほとんどそれが相即して顕れているわけです。相手がしようがないときには、顕れないこともあったけれどもね。キリストはもう常に根源現実を直ちに相対現実に現象するようになつた。我々の場合は、相対現実に現象しない場合がいくらでもある。けれども、どうぞ、この根源の現実で受けとつてください。いわゆる御利益信仰はこの相対にばかり気がとられている。

「さあ、それがどうなるだろうか、ああなるだろうか」

と言つてね、

「ああ、こうなつた」

といつて今度は現象を喜んでいる。それはいわゆる御利益信仰です。

もうひとつ奥の根源現実を受けとつていている信仰は、相対現実のプラス・マイナスにかかわらず、本当の前進をしていく。だから、その人は死んでも死なないんです。相対的現実とは死ということになるよ、我々も。けれども、死なないんです、根源現実が既にその人に成っているから。普段、そこまで本当に祈りの世界で受けとつていかないと。また、実存の世界でそれを自分で体験していかないと。それはもう、キリストの根源現実なる、実体なるキリストを受けとつていけるからね。

41 ……イエスを挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。42 常にき

き給うを我は知る。

凄いいね、

「常に聞き給う」

と。これまた間違えては困る。我々は、お願いがまちがっていることもあるかもしれない。そのまちがったお願いが聞かれなかったりしたら、なんののかんと。そうじゃない。お願いが聞かれなかったら、

「願以上の願いが聞かれている」

と、こうこなくてはいかん。我々の願いは悲願だよ。悲願以上の本願がある。本願は常にこの悲願を受けとつて、悲願以上のもので本願は聞いていくくださる。そうなつたら、問題ないじゃないですか。これだけの世界に入つてしまうと、人は誤解するかもしれないよ。

「あの野郎はどうだこうだ」

なんて。誤解されれば誤解されるほど、私は本ものだということが分かるわけです。



●本願道を行くのみ

そういつた相対のプラス・マイナスの奥の世界の本当のプラスの世界。これが本当の信仰なんです。キリスト一切です。だから、これを私は——この頃の自分の好きな言葉の——本願道と言う。ただこの本願道を行くのみというのがそのことです。躓いても転んでも滑っても倒れても、この本願道を行くのみ。

「でも、お前はこうじゃないか、ああじゃないか」

と、いくらでも仰ってください。そんなことに関わりないのだから。そういうようなこの本願道を行くのみ。もういつもその中に自分が消えていくんだ。突入していく。姿が見えない。

「小池なんてはこういう者だ」

と定義したら、それは間違いだよ。定義できないんだ、私は。

イエスというひとは定義できない。とにかく、第一流の人物というものは——私は自分を第一流なんて言っているんじゃないけれども——定義できない。説明もできない。これはゲーテも『ファウスト』の中で言っている。なぜ、ゲーテ研究や、シェイクスピア研究がいくらでもできるかというと、彼らは定義できないようなところに入っているものだから。あつちから見たり、こつちから見たりして、いろんなことを言っているだけなんです。ダイヤモンドみたいだから、こつちから見ると紫に光って、あつちから見ると黄色く光っている。ところが、自分は無色透明なんです。そういう意味において、ダイヤモンドというのは素晴らしい。もの凄い光を発する。無即無限色です。無即無限色のような人になったら、これはみんな本ものになる。

「何々教でなければいかん」

なんてことはない。だから、

「私は、プロテスタントでもありません。カトリックでもありません」

と言う。「では、お前は何だ」と、

「キリストに直結しているんだ」

と、はつきり言う。

「では、歴史を無視するのか」

と。そうじゃないですよ。歴史を無視するわけではない。我々は「武蔵野幕屋」というひとつの集会で、こういったひとつの特殊な存在だよ。けれども、そんなものに決して執着なんかしてやしない。有れども無きがごときやつだ。そういう、

「有れども無きがごときやつだ」

と、パウロが言っているような自在なものです。



●自然法爾者キリスト

「自然法爾」
「自然法爾」

という言葉を知っているかな。私の大好きな言葉なんだ。自ずから具わって然るものであつて、諸々の法が、ダルマが自在にその中に具わっていることを「自然法爾」という。出エジプト記3章の有名なところに、

「我は有りて在るもの」

とある。私はこれを、

「我は有りて在るしむるもの」

と訳す。ところが、漢文の聖書では何と書いてあるか。

「我は自然にして然るものなり」

と書いてある。私はこれを読んで、うれしくてしょうがない。漢文というものは実に味がある。そして、あとの方に

「我在りというもの」

と書いてあるでしょ。これは、

「我自然なるもの」

と。

「我自然者」

と書いてある。神さまは「我自然者」と、漢文の聖書はそう理解している。

シナの漢語というものは世界一です。非常に含蓄がある。これはもうヨーロッパの言葉はかないやしない。その素晴らしい漢字をへんてこな略し方をしているのはとんでもない話なんだ、本当は。今は中国でも少し略しているが、あれはよくない。みんな精神をまちがった。

「我、自然なるもの、自然にして而して然るもの」

と。これは自然法爾の世界。自ずから空々漠々たるが如くして、その神の御意の中に溶け込んでいるが如きもの。キリストがまさに自然法爾者です、イエスが。

ヨーロッパ神学なんてやる必要はなにもないよ。まあ、バルトさんも、ブルンナーさんも偉い神学者だけれども、二人とも最後にやはり聖霊のことに気がつき始めた。そして、

「今まで聖霊を本当に取り扱ってなかったことは我々の欠陥であった」

ということと同じように——もちろん別の表現だけれども——晩年に気がついてるんだ、この自然法爾者キリストに。

●「ラザロよ、出で来れ」

41……イエスを挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。』42常にき

き給うを我は知る。



と。こういう言葉を、

「あ、キリストはそう仰つたでしょうけれども、ちよつと私には無理だな」
なんて。ちつとも無理じゃない。イエスの言葉は全部、私たちにそのまま与えようとして
いる言葉なんです。

結婚が思うとおりにいかないかもしれない。就職が思うとおりにいかないかもしれない。
けれども、思うとおりにいかないような奥に、神さまは何を企っているか分からない。そ
こを

「ぎぎ給いしを謝す」

と言って突破していく。そうすると、その人を通して何が起るか分からん。死人を甦ら
せるようなことが起るでしょう。相手を引っくり返してしまう。何もなくても、何も
言わなくても。キリスト教のキの字も言わなくなつて。

「やっぱり、これは違うな」

と。女の方々は少しも悲観することはない。大事なことは、このイエスを本当に受けとつ
ているということ。誰が何と言おうと絶対に負けませんよ、その点で。いいですね。

信仰といったら、その次元に入らなかつたらつまらないよね、観念信仰、研究信仰なん
てでは。もうとにかく、あなた方は福音書に酔ってくださいよ。そうして、直ちにキリス
トと同じ次元に入れる。

43 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給えば、44 死

にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれた

り。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。(ヨハネ11・1〜44)

これはレンブランチの素晴らしい絵があるね。まず、驚くべきひとです。根源現実で
既にこの甦りをちゃんとキリストは受けとっている。神さまの本願に完全にのつかつて、

「ラザロよ、出で来たれ」

と。これは凄い言葉ですよ。もの凄い力が入っている。キリストの全存在がこの言葉の中
に全部投入されているような言葉です。愛の本願なんていうものは烈々たるものですから。
愛するとは相手を救いあげることである。その他に本当の愛はない。担いあげ、救いあげ、
助けあげる。この「あげる」が大事なんです。

そして、包帯を解いて往かしてしまつた。まあ、パリサイ人だの祭司、宗教家なんかは
全くこのキリストの前には、ユダヤ教は完全に敗北です。

福音書のこのキリストを見て、これをメシヤとしないで、今でもユダヤ教徒はキリスト
を受けとらないということは一体どういうことか。ユダヤ人というのは本当に頑なな民だ
ね。イスラエルなんてものは律法そのものみたいだ。ところが、律法は本当は福音が隠さ
れていたことを知らない。

そのような三つの徴。キリストが私たちを死から本当の生命に甦らせる。今、現に私た



ちの相対的な「信仰なき我」なんていうものは生ける屍みたいなものだ。本当の生命の中にいつも私たちはキリストに、

「目覚めよ。起きよ」

といて、永遠の生命の中に甦らされて生きていく。毎日毎日が甦りですよ。毎日毎日が復活節だ。今日ばかりではない。

「毎朝毎朝、復活節」

眠りという死のごとき眠りから朝目覚めるのは、死から生への転換だよな。

●エマオ途上のキリスト

今度は、ルカ伝24章にいきましょう。エマオ途上のキリストという、これは有名なところですよ。人生は旅のごとし。我々は一人で旅することもあるし、幾人かで旅することもあるし、二人で旅することもいろいろある。一人であろうと、二人であろうと、三人であろうと、何人であろうと、我々の人生は旅である。やがて次の世界に行くところの旅である。それで、旅で歩いていると、ここに大事な言葉がある。

「¹³視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオと

いう村に往きつつ、¹⁴凡て有りし事どもを互に語りあう、¹⁵語り、かつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。」

「イエス自ら近づきて共に往き給う」

という言葉です。キリストは近づいてくる。「主よ御許みもとに近づかん」という讚美歌があるけれども、これは

「主よ御許に近づかん」

でなくて、

「主は我らに近づき給う」

というんだ。そういう讚美歌を作るといい。あの譜でもってそういう讚美歌をひとつ作ろうかな。我々の讚美歌も少し作っていかなくてはね。

主は近づいてくださる。うれしいね。こっちは気がつかないのに、キリストの方から近づいてくださる。

「キリストはどいかに近づいてくるか?」

なんて、こっちから捜すのではない。向うから近づいてくださる。

「寂しかろう」

というわけだね。だから、一人でいても寂しくない。キリストは近づいている。

この二人は、イエスが十字架で死んでしまったというわけで、

¹⁷イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』

一体、何を語っているのかと。



「とうとうあのイエスという人は散々みんなにけなされて、十字架にかかって死んでしまったが、どうにもならんね」

なんてやっていただろうな。

かれら悲しげなる状にて立ち止り、¹⁸その一人なるクレオパと名づくるもの
答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』

と。近づいたキリストに、

「あんたはこの頃の最大のニュースを知らないか」

というわけだ。イエスは

「どんなことだね」

なんて、とぼけている。

¹⁹イエス言い給う『如何なる事ぞ』

と。こういうとぼけ方をしたいものだね。

答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて業にも言にも能力ある預言者なりしに、²⁰祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹我等はイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、

とんでもない見当違いをしてしまったと。

然のみならず此の事の有りしより、今日にはや三日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼らの朝風く墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れてイエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』

墓が空しくなつて、天使がいたということだけはあるけれども、本当にキリストにでつかわしたのは、マグダラのマリヤが一番先だったんだ。

²⁵イエス言い給う『ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』

「私は」と言わないで、あいかわらず、「キリストは」と三人称で言っている。そういうことが分かかりますかと。キリストは、旧約聖書はみな自分に焦点しているところの光であると思つて、読んでいるからね。

旧約の預言、旧約は全部、キリストに焦点を結んでいる。我々が旧約を読むときには、この焦点から読まなければダメです。イエスの光をもつて旧約聖書を読めば、楽に読めてくる。お伽話がお伽話でなくなってくるんです、お伽話やお伽話的な神話でも。大体、聖書の神



話といたって、みな何らかの意味における事実が背景となっている。やつとそのことがたくさんの発掘によってだんだん分かってきた。それから、口伝というやつがばかにならぬ。昔の人は本当に口伝えでやっている。日本の古代のものもそうだけれども、よく覚えてる。そこにいろんなものが付け加わることもあるけれども。

● 近付いて一緒に歩いて中に入る

27 かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。

これは大変なものだ。「凡て」といったって、もちろんその重点だけでしようけれども。それですっかりその言葉に動かされてしまつて、

28 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29 強いて止めて言う『我らと共に留れ、

「メネイン」という、「宿つて」くださいという字です。

時夕に及びて、日も早や暮れんとす』すなわち留らんとて入りたもう。30 共に食事の席に著きたもう時、

一緒に夕食を食べようという。夕方のいかにも何ともいえない光景を思い浮かべますけれども。

パンを取りて祝し、

おそらく種入れぬパンでしょうね。

擘きて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えぬなり給う。

キリストがパンを裂くその動作をかつて見て知っていたから、パツと思つたんだな。とんでもない旅人だなんて。ところが、見えなくなつてしまつた。それから、

32 かれら互いに言う『途にて我らと語り我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

「非常に心が何かしらんけれども燃えてしまつたじゃないか」

と。開眼。眼が開けた。眼が開けたから、イエスであることに気がついた。気がついたらイエスは姿を消してしまつた。どこに消したかという、実は彼らの心の中に姿を消してしまつた。彼らはそのことを知らない。

「近付いて、一緒に歩いて、とうとう中に入つてしまつた」というわけです。近付いて一緒に歩いて中に入った。

あなた方、うちなるものが見えますか。我々は自分の顔すら見えない。鏡を見れば見えるかもしれないが、蟹みたいに目玉が出てはいはしないから。自分の顔をついに生涯、実は直接に見ることは誰もできない。鏡で知っているだけのなし。写真で知っているだけの



はなし。ところが、内なる世界はもつと分らない。

ところが、一番分らない世界が一番分かるんです、これが。相手を見ているよりも、内なる世界が一番はつきりと内観できる世界。私たちがキリストを御霊において受けとっているその事態は、世界中の人が何と言おうが、これを否定することができないという確かさが、この世界です。それだけの確かさを持たなかったら、それは信仰ではない。信仰ほど確かな世界はないんです。非常に逆説的なものです。

ここにある花を見ているのは、あるいは錯覚かもしれないけれども。この花を見て、この花が私の心の中に本当に花咲いたらば、この花は萎んでもいいよ。

「ああ、切り花はせっかくいいんだけど、またそのうちに萎んでしまうな」

なんて、情けない顔する必要はない。その素晴らしい切り花の姿を自分の中に宿してしまえばいい。

聖書もそうですよ。この聖書の文字をくらってしまおう。食べてしまおう。

「私は聖書は要りません。聖書はみんな私の中にありますよ」

ということになったら、これが最高の世界なんだ。

ドイツでは、教会に聖書が置いてあるものだから、みんな聖書を持たないで教会へ来ていたけれども、ああいう親切はちつとも親切ではない。本当は不親切にあの所に聖書なんか置かない方がいい。自分で聖書を持って来ないぐらいなら教会に来なさんなど。私ははつきりそう言ったですよ、ドイツで。

「なんで聖書を持ってこないか。聖書は我々の生命の延長ではないか」

と、私は牧師に言った。それを、

「プロフェッサー小池がそう言った」

と牧師が壇上で言ったけれども、あいかわらず持つて来なかった。ダメだよ。私は、本当のことは遠慮なく言うからね。

私はこのボロボロの聖書が大好きだ。私をもつと記憶力がよければ、私はこの聖書は要らなくなるけれども、私は記憶力がわるいものだから、しょっちゅう持つてなければならぬ。しかし、大事な句くらいは心の中に刻んでいます。とにかく、生ける文字となって、自分自身が即ち活字となって、

「もう聖書と我とは一つなり」

ということに、身についていることが一番大事です。身という字が非常に大事な字です。全身で身読、からだで読む。

●平安なんじらに在れ

そんなわけで、近付いて、一緒に歩いて、中に入る。これがエマオ途上のキリストというわけだ。近付いて一緒に歩いて中に入る。ところが、この二人は中に入ったキリストは



知らないんだ。これは聖霊を受けるまではダメなんだよね、中に入っても。

³³斯^{かく}て直ちに立ちエルサレムに帰り見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦^{よみが}えりて、シモンに現れ給えり』

と。キリストは中に入ったかとおもうと、今度はちゃんとあつちの方にも行っている。もうこれは自在ですよ。自然法爾の世界はそういうんだ。同時にあつちこつちに現れた。同時に我々の願いをみんな聞いていらつしやるという不思議な世界だから。

³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘^さき給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、

彼らの中に立った。けれども、キリストは彼らの心の中にちよつと自分は入ってらつしやっても、彼らはそいつを本当にまだ受けとつてないけれども。

『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。

この、

「平安なんじらに在れ」

という、平安が本当に私たちの中にあるときには、キリストが入ってなければ平安はない。これは聖霊が来なければ、本当の意味でできないんだ。ただ、キリストが「平安なんじらに在れ」と仰つたつて、本当の平安は、まだ約束されているだけであつて、まだ現実ではない。イエスはそんなことは分かつていらつしやる。

平安というのは、運命環境がどのように荒れ狂おうが、どんなにマイナスのようにみえようが、ここは天国である。地獄の中の天国だよな。煉獄の中の天国。ダンテはそこまで書けなかった。まあ天国に似たようなところはちよつと地獄の一方所に、ギリシアの賢人たちのところがちよつとあるけれども、あれはまだ仮天国みたいだ。本当の天国的平安というものは、そこが地獄であろうが、煉獄であろうが、そこが天国であるところが平安。これはキリスト。キリストがあるところ。こうなつたらもう自在です。

どうぞ、私たちはこの平安という、

「キリストわがうちに在りたもう。われキリストの中に在る」

とパウロが言った、あれが本当の平安の世界。もの凄く力があるんです。これはもの凄く力強い大生命の世界です。大生命の現実ですから。天的な愛だとか、光だとか、生命が漲り溢れているような世界です、この平安というのは。

それくらいキリストが慕わしくなりましたか。私は昔は、キリストというのはそういうように受けとれなかったね、なにかおつかなくて、こつちがしゃつちよこばつてしまつて。ただ少し感情的にロマンチックに受けとるくらいはなしで、本当の現実でない。

これが

「平安なんじらに在れ」

というのを、私はキリストを今この現実以上の現実をこのキリストの言葉に受けとるわけ



です。それは、今度は使徒行伝の聖霊の世界です。キリストはよくわかってらっしやるんですよ。

37 かれら怖し懼れて見る所のものを霊ならんと思ひしに、38 イエス言い給う『な
んじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、

騒いだり、うろたえたり、疑ったり、それはダメなんだ。ところが、よく人間の心には
こういう波が立つ。波は立っても、すぐその奥の世界に入ってくださいよ。磁石の磁針は
振れても、北を指すように。

●キリストの霊骨霊肉

39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、
我にはあり、汝らの見るごとし』

キリストは、霊骨、霊肉を持つている。これは相対的な肉や骨ではない。霊的な、もう
ひとつ凄い骨と肉を持つている。すぐこれは霊界に消えてしまうような、見えなくなつて
しまうような、そういうったものです。もう再び死ぬことのない骨と肉です。

ルカ伝のここところにくると、神学者も牧師さんたちもみんな躓いてしまうわけだ。
それはその霊的な素晴らしい現実が受けとれないものだから。私はちつとも霊的な男では
ないけれども——どういうもんだらうね、これ——無理なく受けとれる。

「キリストの現実というものは凄いな」

ということが、私にはもう驚嘆と喜びだから、受けとらないではいられない。ギリ、ギリの
最後の世界を受けとらないではいられないんです、私は。

「ここに何かがあるか」

と言ったら、お魚を食べてしまった。

40 斯く言いて手と足を示し給う。41 かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、

イエス言い給う『此処に何か食物あるか』42 かれら炙りたる魚一片を捧げた
れば、43 之を取り、その前にて食し給えり。

一流の神学者たちの会合でここところに来たら、みんな笑ったから、

「ああ、そうですか」

と、私はその次の回からそのグループからサヨナラした。

44 また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に
就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げら
るべしと言ひし所なり』

エゼキエル書37章に枯骨の復活というのがあったね、あのよう。日本あたりでは、と
にかく死ねば、骨も肉もみんな焼いてしまう。それは焼けたっていいですよ。霊肉、霊
体というものは新しく着せられてしまう。霊骨霊肉が新しく生じてくるんだから。キリス



トに連なる者はそれ以下ではない。それを100%に受けとってください。受けとらないで済む人はどうぞいいように。私はそういうことは遠慮しない。聖書のもの凄い次元は、受けとると、何だかしらんけれども、もの凄い力が来るからしようがない。

45ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難くるしみを受けて、三日めに死人の中より甦よみがえり、⁴⁷且その名によりて罪の赦ゆるしを得さする悔改くいあらためはエルサレムより始まりて、もろもろの国人くにびとに宣伝のべつたえらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、

聖霊を、

汝らに贈る。汝ら上より能力ちからを著きせらるるまでは都に留れ』(ルカ24・13)

49)

留まって祈っている。

「私が受けとっていたところのこの神の霊、聖霊を受けとるまではどうにもならんぞ」

というわけです。

●十字架と円環

私たちの最初に受けとるものは、何といっても、十字架です。自分自身がどうにもならないやつなんだな。いくら悟あきつたつて、いくら諦あきらめたつて。諦めをたてるには、ある意味においてはいいですよ、仏教の世界には大いにそういう面があるから。けれども、それは本当の現実からは少しやはりズレている。本当の創造的な生命的なこの現実というものは。

大体、自然界はどうですか。この太陽系、またたくさん銀河系みたいな宇宙がたくさんあるというんですよ。もの凄いエネルギーの相引き合っているところの、また、ある意味で離れていくという面もあるらしいけれども、そういったもの凄いエネルギーによって構成されているものだから。とうてい人間に考えられないね。太陽が地球を引っばっているエネルギーなんてものは。もう不思議でしょうがないね、この自然界の事態は。しかも、それは非常な法則で、毎年毎年こうやってグルグルグルグル、地球は回転しながら公転している。この回転がもし乱れたら、もう地球はどこかへすっ飛んでいって、全部おしまいだ。そういったエネルギーにおいて動いている実世界ですけれども。

我々のこの生ける存在というものは、霊的なエネルギーによって動いているに相違ない。だから、キリストという方は、イエスというひとは、本当に神のエネルギーで、神の大自然において、その中に自分を突入されて生きておられた。祈りというのはまさにその世界にいつも自分を投じていることです。投入していることです。



入る。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と。何が聞かれたかというのと、一番素晴らしい、神さまを受けとったことが即ち、

「聞かれたり」

ということ。神さまだけ、キリストだけを受けとってごらんよ。そうしたらもう、内容は
どうでもいいよ、どうなっても。

「私はあなたを受けとりましたから、もう私の願いは全部聞かれている。どうなっ
てもいいです」

と。そうすると、キリストは凄いことをなしてください。行き詰まっても行き詰まらない。
豁然として開かれていく。本当ですよ。それを、

「そうだろうか。こういう場合はどうだろうか」

なんてではいつまでたっても始まらない。皆さん、ダメなやつほど凄くなるんですから。

「私はダメだ」

なんて、さじ投げることはひとつもない。

「善人が救われる。いわんや悪人においてをや」

という。能力あるやつが仕事ができる。いわんや能力ないやつはいよいよできる(笑)。そ
れはキリストがそう言ったじゃないですか。

「われ何事もなしあたわず」

とキリスト自身が無能者なんだ。そうしたら、キリストは、神さまがすべて彼を通してな
した。

「われ何事も教えるあたわず」

と。キリストは何でもしゃべった。それがさっきの自然法爾という世界です。これは次元
が高いはなしだが、実は一番本当は簡単な世界です。誰でもが入れる世界なんです。

そういう、キリストの御霊が本当に宿る。聖霊の中に入り、聖霊が宿る世界に入れてこそ、
初めて大生命であつて、もうキリストの「復活節」なんてちゃんちゃらおかしいよ。キリ
ストの大生命は十字架を通れば、もうキリストは甦らざるを得ないのでね、改めて言う必
要はなにもない。それをしかし、弟子どもも誰もみんな本当に受けとらなかつた。

情けないもんだよ、人間なんてものは。だから、イエスというひとがいかに桁ちがいの
ひとであつたか。このひとでなければ救いはないということがはつきり分かる。32、33歳
で地上の生涯が終つたひとですよ。私なんか160歳くらいまで生きなければどうにもならな
い。160なんてことをなぜ言ったかというのと、半寿の祝いというのがある。シナでは160歳が
長寿で、その半分の80歳が半寿という。

